

はじめに

今回お届けする東京家政学院生活文化博物館年報では、令和元年度の展示活動の記録と、令和2年度の博物館実習報告及び事業報告等を掲載しております。特別展では旧短期大学の工芸染色研究室が所蔵していた染色品を展示し、型染、絞り染、友禅染といった染色技法の多様さを紹介しました。これらは学生が授業で染色作品を制作するための参考資料として購入されたと伝わっています。学生たちはこれらを手にしなが、熱心に学んだのでしょう。染色というと現在では美術的な営みに思われるかもしれませんが、かつてはその位置づけが多少違っていたように思います。明治から大正期の婦人雑誌には染め物の方法に関する記事が多く掲載されています。その理由は何かと言えば、趣味としてというよりもむしろ、家族の衣服の厚生のための技術であったと言えます。つまり、一つの衣服を長く着用していく中で、色あせた着物を染め替えたり、模様染めをしたりしてイメージを一新していくための生活の技術だったのでしょう。短サイクルの現在の衣生活とは、衣服に対する向き合い方の違いがわかります。さらに、布帛を思い通りの色に染めていく行為は、生活にまさしく彩を添えることにもなり、日常生活に潤いを与えたと思います。

また、文部科学省の情報ひろばで行った、江戸の料理の再現した料理標本を中心とした展示に関する講演会の内容を掲載しております。これは2011年の特別展でも紹介したのですが、新たな場で公開の機会を得ることができました。江戸の料理標本は、江戸時代の料理本の研究と、今日の調理の技術、栄養学の研究が一体となったもので、家政学を追究する東京家政学院大学ならではの成果です。本号の報告をご覧になって、皆様にも興味を持っていただけたら幸いです。

今後とも年報をより一層充実させていきたい、ご意見等いただけましたら幸いです。

2021年3月

東京家政学院生活文化博物館館長
山村明子